

地方小出版

# アクセス

情報誌

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 139円)
年間 1,500円 (税込み)	
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター  
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町 20  
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

## 名編集者・大久保房男先生逝く

心を打つ小説とはどういうものかを、実際の編集経験を活かし、とことん考えて書き続けた。

文・菊池洋子 (紅書房代表)



<紅書房から刊行されている大久保房男氏の著作物> 写真上段右から、『文藝編集者はかく考える』1988年4月初版 第五刷・定価2,700円(税込) / 『理想の文壇を』1993年9月初版 第二刷・定価2,621円(税込) / 『文士とは』1999年6月初版 第三刷・定価2,484円(税込) / 『終戦後の文壇見聞記』2006年5月初版 第二刷・定価2,700円(税込) 下段右から、『文士と編集者』2008年9月刊・定価2,700円(税込) / 『戦前の文士と戦後の文士』2012年5月刊・定価2,484円(税込) / 『海のまつりごと』1991年3月初版 第二刷・定価2,935円(税込)

「純文学の鬼」と畏られた元『群像』編集長で作家の大久保房男先生が7月25日満92歳で亡くなられた。90歳を過ぎてもお元気で執筆なさっていただけに、残念でならない。

小社では、1988年以来26年の長きにわたりご指導を頂き、その間6冊の文藝編集者ものと、1冊の書下ろし小説を出版させていただいた。それらは小社の大切な宝物として、どれも刊行以来品切とならないように努めている。

大久保先生の本は、新聞の匿名批評や書評に取り上げられることが多く、

知名度の低い紅書房の名も出して頂き、感謝に絶えない。大久保本が出ると、ある作家は、まず自分に対する批評が書かれていないか気にして頁をそうっとめくり、書かれていないことがわかると、安心して大きく開いて読み始めるそうだと大久保先生から伺ったことがある。作家からいかに恐れられていたかがわかるエピソードだ。

### 海賊の末裔

大久保房男とはどんな人であったのか、著書のなかに自画像の一文があるので紹介したい。

「大正10年の二百十日、熊野灘の漁港の生れ。石坂洋次郎氏にはいつも熊野の海賊の末裔と紹介されたが、先祖はたぶん海賊。小学校を終えて伊勢の津中学、慶應義塾と進み、学徒出陣による海軍の二年間をのぞいて下宿生活十四年。民俗学者たらんとして折口信天先生に師事するも、師を越えること不可能と覺り、都電の『群像』創刊広告を見て講談社に入る。昭和三十年編集長、四十一年退く。近代日本文学と民俗学の知識少々あるも、他のことは恥かしい限り。」と謙虚な文で、大久保先生らしい。

### 名著書紹介

小社刊の第1冊目は『文藝編集者はかく考える』(1988年刊)である。冒頭の章「文章と言葉のこと」を読むだけでも、著者の文章哲学が詰まっていた、作家志望者や編集者ならずとも、とてもためになる文である。「手垢のついた言葉といわれる常套語、子供の文章みたいだといわれるオノマトベ、血の通わぬ概念的な説明、そういったもので文章を書いちゃいけない、通俗的になり、品がなくなる、などという基本的なことは勿論のこと、真の文学とはどういうものかを、誰ということなく、文壇が教えていたのだが。」と、小説などで文章が軽んじられている傾向にたいして警鐘を鳴らしている。

この思いは一層強く次作『理想の文壇を』(1993年刊)へと引きつがれる。文壇には教育機関があるといわれていたその教育機能もすっかり失われてしまったのだろうか、とその変化を肌で感じ取り、「文士は本音でしか物言わぬ」、「元編集者には見える腐蝕」、「批判を恐れる文壇」、「下向いて書くな」、「時代物に手を出すな」などという章題からも察せられるように、日本文学の将来を見据えての提言は、どれも重

みのあるものだ。巻末にある対談「文士・高見順」がまた面白い。お相手は同時期に文藝誌「新潮」の編集者だった田邊孝治氏で、鬼の久保、仏の田邊とも並び称されていたお二人の対話は、作品誕生にまつわる話や言動をありありと伝えてくれる。

第3作『文士とは』(1999年刊)では、伊藤整の大著『日本文壇史』(これも編集者大久保房男の企画)で語られる「日本の文壇においては、作品のよしあしよりも、その作者がいかに生きたかが問われるのです。書かれた作品よりも、書いた人間の方がおもしろいんです」という記述に思いを重ね、自らが見た、それぞれ個性的な文士たちの姿を綴り、飽きさせない。

「文士の女房が死屍累々」や「文士赤貧物語」を始めとする凄まじいまでの文士の生き方は、それぞれの作家の作品に結晶しているものもあるが、また書かれなかった別の小説のようにも感じられるほどだ。

第4作『終戦後文壇見聞記』(2006年刊)では、題名が示すとおり、戦後、文壇はどう変わっていったのかを、青野季吉、伊藤整、丹羽文雄、高見順、佐藤春夫、中野重治、佐多稲子、平林たい子など作家別に、その執筆の様子や周辺の動向を交え綴っている。

この作家たちの名前からも感じられるように、左翼作家の動きや戦争責任の追及にも触れて興味深い。阿川弘之氏はこの本について「作家評論家一人々々の顔の表情が泛んで来るやうな描き方がしてあるので、大変面白い」と『月刊文藝春秋』の巻頭随筆に取り上げて下さり、お蔭で出足よく有難かった。

第5冊目は『文士と編集者』(2008年刊)。

ここでは大久保先生が育てたといわれる「第三の新人」の作家たちの中で、安岡章太郎、吉行淳之介らが長編作品に取り組み、それらが評判を呼び、徐々に名声を得ていく様子が明かされて興味尽きない。

そして遠藤周作氏との対談や、遠藤氏の結婚にまつわるエピソードなども一読の価値あるものだろう。また高見

順氏のことを書いた『『いやな感じ』をめぐる思い出』は、お互い作家と編集者という立場で一步も譲れないという気迫がこもり、火花が散るような文章だ。

第6冊目は『戦前の文士と戦後の文士』(2012年刊)。ここでも大久保先生の主張は緩むことがない。「うまい小説と重い小説」、「悪評への耐久力」、「文士は文章でメシを食っている」、「悪口と匿名批評が純文学を守る」などの章題を紹介しよう。戦前の文壇では誰もが貶されたり厳しい批評を受けて、文士としての実力を備えていったという先輩作家からの見聞をもとに、戦後変ってゆく文士の姿を語る。

また「日本で最も恵まれた文藝編集者」および「古きよき時代の編集者」では、様々の苦労や困難に当たりながらも、よき文士や理解ある社長のお蔭で満足のいく編集者生活であったことを回想する。

### 純文学の編集者が書いた純文学小説

最後に書下ろし小説『海のまつりごと』(1991年刊)に触れたい。大学生になった中島は紀州熊野出身の同級生南部と知り合い、冬休みに帰郷した南部の誘いを受け、ある漁港に着く。網元である南部の父親の厳めしさ、水夫たちの様子、初めて連れていってもらった漁にまつわる風習や漁法、町独特の仕来りや言い伝え、過去の事件など、東京生まれの中島には驚くことばかりであった――。

折口民俗学を学んだ著者が、故郷紀伊長島町を舞台に、彫琢された言葉や文章をもって書き上げた小説で、本作で平成3年度芸術選奨文部大臣新人賞を受賞する。今から20年以上前に書かれたものだが、町に起きた原発設置問題を運命共同体のような漁師たちが反対するという場面もあり、今回久しぶりに読み直してみても、なお新鮮な味わいに満ちた中身の濃い小説であることをあらためて確認した。

### 大久保本の魅力

大久保房男の本の特徴は、他の編集者の著書に多くあるように、作家の知られざる素顔や作品誕生の秘話が伺えるということも勿論だが、そこからさ

らに突き進んで、ホンモノの文士とは何か、教育機能を果たしていた文壇とは、心を打つ小説とはどういうものかを、実際の編集経験を活かし、とことん考えて書き続けたことではないだろうか。批判的に書く作家や評論家の名前はあえてあげず、比較のために登場させている。個人を非難することが目的ではないのだ。そういう点にも独自性があると思う。

### 「鬼」の由来

中野重治氏の『むらぎも』の単行本が完成したときに、中野氏は「鬼のごとき君が督促はつまるところ愛のごときかりしものと我は合点す」他一首を扉に揮毫して大久保先生に渡されたそうだ。高見順氏も督促を緩めない大久保先生の態度に苦しみつつ、名作『生命の樹』を完成させたとのこと。中野氏も高見氏も十歳以上年上のすでに名をなしている作家であっても一切容赦しなかったことから扱ってつけられたそうだ。

### 名編集者の本を編集して

第一冊目刊行はひとり出版社を起こしてまだ三年目のこと。無知無能は承知のうえ、体当たりで出版をお願いしたところ、幸いにもお受け頂いた。こちらの怠慢や言い訳がましい弁解にお叱りを頂戴したことも幾たびか、以後誠実第一を心がけ、様々なことを教えて頂きながら一冊一冊が出来上がっていった。

校正のやりとりが終わってほっと一息つくまもなく、こんどはまるで言葉クイズのように「あんた、ハハジャヒトってわかるか」「キンカクは」「サリキライは」「四六時中は使わん、二六時中だ」、こんなご下問がたびたび行われた。

私の場合は右から左へ抜けていくばかりだったが、教養と記憶力に優れ、本当に頭の強い先生であった。紅書房を見捨てず、長年お付き合ひ頂きましたことを心より感謝申し上げます。

(きくち ようこ)

